

エプロンにあわきみどりのかげさしぬうらゝに日てる初夏のまご。
かさなれる森のわかばのたえまみそら見いでしかろさうれしさ。
うれしさの胸にあふるゝ心地して朝の森のわかばをぞみる。
さしてゆくわか傘の上にならゝとわかばがさす野邊のほそみち。
日のあたる垣根の竹に足袋ほしぬ紅の花ちるゆく春の朝。
たかむらにうぐひすなきてゆく春の淋しき寺にわれは來にけり。
わが背戸の桐の葉毎につゆおきてさみだれはれぬ日曜の午後。
くれちかき春の日かげにかゝやける空みるごとに海をこそ懐へ。

朝のひかり

赤城にて T. H.

うすあはく若葉のかをりかきろへば故郷人のしのばるゝかな。
わかはもる朝の光を身にあびてひどりぞうたふ夏に入る幸。
わかにはほふ大野あゆめはひやくと袖にこぼるゝ朝つゆもよし。

感

想

不惜身命

抑 妙

法華經勸持品曰、不愛身命、惟惜無上道と。これ、
實に、人生最後の歸結、常住の妙處にして、人生の
意味を豊富高尚にし、理想を追求して己まざる、大
奮闘心大努力心を賦與し、吾人をして、眞の安禪境
に導くもの、またこれによるにあらざるべきか。彼
の基督教に所謂、砂上に礎せる家屋の如く、日々に
傾きて安からず。時に、洪水暴風ある毎に、忽ち顛
覆して、その所を知らざるもの、また多くはこれを
失へるによるなるべし。然らば、吾人は、かくも尊
き靈性をば、いかにして保ち、いかにして養ふべき
か。知らず、唯、天の理、人の性に從ふのみ。易曰、
天大徳日生と、生々不已之謂也。見よ、蒼々たる天
に、日月ありて高く輝き、曠々たる地に、草木あり
て常に榮え、鳥獸は喜々として、空を翔けり、地を
走るを。これ一に、日月の運行、その軌を誤まらず、
雨露の降ること、その宜しきを失はざる、赤誠仁愛

なる、天理の主情に發するにあらずや。而して吾人
聞くあり、宇宙は一元氣のみ。理なるものは氣中の
條理なり。氣集まりて物を成せば、理もまた從ふ。
しからば、この氣の集まりて、吾人を造るや、理も
また方に從ふべし。人の性なるもの、即ちこれなり、
と。然らば、至誠は人の性なり。仁愛は、人の性な
り。孟子の性善説に曰く、人の性や、惻隱羞惡辭讓
是非の四端を有し、四端の實行せらるゝや、即ち仁
義禮智の四徳を生ず、と。しかも、これが、源動力
となり、四端の實行をして、最大最善の効果を收む
るものは、吾人の至誠より迸出せる、不惜身命の行
爲にはあらざるべきか。
抑々、高き天と、厚き地と、吾人とは、宇宙の三
寶なり。而して、天に、理ありて、その尊きをなす
が如く、吾人、人類におきて、尊きものは、唯、こ
の靈性をやどせる心あるがためなり。見よ、この心
の偉なるや、よく日月の精を知り、山河の妙を感じ、
五尺の肉身に宿れども、時に、山川を超え、日月を
貫きて、宇宙の外に出でんとし、肉體や、五十年の
生涯にすぎざれども、靈や、よく、万古の古より、

千載の後を照し、若しそれ一度凝りて、端然として臨めば、沍寒の中に春陽の候を現じ、炎熱の中にありて、よく、清涼の氣を感じ、時に、鬼神を動かし、疾病を威伏す。げに至大至剛至玄至妙は、わが心なり。あゝ、されど、世に、養はれずして、よく、全きものありや。この至大至剛なる、わが心力と雖も、養はざれば、日々に氓び、磨かざれば、時に暗し。心すでに氓び、靈力すでにくらまば、鳥の鳴くも、その妙を知らず。花の開くも、その精を見ず。況や宇宙の性相をや。かくてわれど、わが尊さを忘れては、得るに喜び、失ふに嘆き、融合聚散常なき世に、われどわが身を苦しめ、心を勞して、五十年の生涯、終に盡きなんとす。あゝ、岩石の磊々たる、猶無限の意味を語る。至尊至妙の靈を受けたる吾人人類におきて、天地宇宙の玄妙にふれ得ずして、空しく朽ちなんは、いたましからずや。

天地を我が家とし、万有を我が友とせる吾人。吾等が、天地の偉大を、求めて、限りなく進み、宇宙の壯と、相參じて、清く、高き、別天地を認め、時

もよし、要は精神にあり、赤誠にあり、不惜身命の大勇猛心にあるなり」と。此の言果して如何。しかも、この心の存する所、天に非らず、地に非らず、求むれば、常に、我が心に存じ、吾よく、これを用ふれば、我がために、よく、新たなる境を開く。こゝに吾等は、一切の情實權威を、離れて、孟子に所謂富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈の境、即ち、不惜身命の境に、達するを得るなり。而して、國家は、かゝる人、あるによつて、常に興り、社會の進歩發達は、かゝる個人の一舉一動によりて、形成せらる。彼の、十字架上に蔽れし、基督は、いかに、世の文明に貢獻せしか、釋尊、孔夫子の如き、また、永遠の人類精神界の指導者ならずや、これ元より、天成に出づる所にして、はかり知るべからざるものありと雖も、亦、正しき信念の上に永住して、これを養ひ、これを磨きたる結果にはあらざるべきか。かゝる意味に於て、吾人は、翻つて、現代を思ふ時、實に、一大偉人の出現を希望せずんばあらざるなり。見よ、我が國の現代を、維新、以來、泰西文物の輸入の盛んなりし、我が國の文化をして、空前の

に、人事をはなれて、高く嘯くもの、これ、その心を、養ふ所以にはあらざるべきか。而して、これをなすの道、吾人は、一に、信仰の力にありと斷ず。ある、靈感を、感得することなきもの、いかでか、天地の靈を、讚美し得んや。げに、信は力なりけり。信仰なき精神は、生ける精神に非ず。信仰なき生活は、眞の生活にあらざるなり。見よ、われらは、永遠にのぶべき、天賦を有す、しかも、古來、偉大なる事業を成せる者は、皆、確固たる信仰の上に立てる、大偉人にはあらざるべきか。天といひ、神といひ、誠といふもの、何ぞ、信仰なき人の胸中に、さゝやかるべき、語ならんや。皆強き信心の奥底より、迸る美はしき叫びにはあらざるなし。われらは、これによりて、高き、自然の相を觀じ、妙なる、宇宙の意味を知り、且つ、此の心あるによりて、始めて、至誠となり、不惜身命の境に到達するを得るなり。故高山博士曰、「ダンバーの戰を以て、神事なりと怒りし、クロムエルは、當時、第一の迷信者なりしならん。されど、その事業は、天日と共に、輝けるに非ずや。迷信なるもよし。信仰なる

發達をなさしめたりと雖も、その、餘りに急激なりしと、國狀の相違とは、弊を遺すことなき、能はざりしなり。即ち、利害を標準とし、結果の如何を目的とせる、功利主義の倫理觀と、何事も、學理的事實的の證明を経ざれば、肯定し得ざる傾向とは、國民の精神をして、等しく、物質に向はしめ、事物の研究、細に渡り、微を極めて、その大觀を忘れしめたるもの、その弊の一には非ざるべきか。犠牲的精神は、人類にのみ存する、尊き性にして、個人は、これによりて向上し、國家は、この精神の集合によりて興る。然るに、功利主義は、これを失はしめたり。且つ、吾人の精神は、神經細胞に非ず。大和魂は、もと學理の外にあり、然るを學術の進歩は、これらをも理論的に説明し、物質的に解剖せんとするに至れり。あゝ、學術的研究、解剖學的細説は、物体の物質的構造、組織はこれを示せども、その物体に宿れる神性を語るべきものに非ず。吾人の精神は神力なり、靈妙なる永遠の不明分子なり。豈、科學的、説明の示し得べき所ならんや。唯、宇宙、人生の大觀中に、自ら悟る所あるもの、或は、大人

物に對する精神的感應、共鳴に於て、その一端を味ひ得るものならんか、然るを現社會は、幽玄なる人生を、機械の如く説明せんとす、その結果や、人皆本性を失ひて、策略謀事を弄ぶ小人のみ、日に多きを加へ、至誠剛直の士、殆どそのかげを潜めんとするに至れり。従つて政治、教育、實業等、社會百般の事業は、何れか、その、本然の發達を遂げつつありや。形式の整美、事務の複雑を以てとらば、知らず、その眞意義とは、相距ること日に遠きを、加へつゝあるに非ずや。思ふに現代は多難多事の時なり。あゝ如何にせば、この非なる風雲を一掃し、國家を富嶽の安きにおくを得べき。曰く眞意義における、民心の覺醒これなり。即ち、万民一致して其の本性に歸し、正しき信念の上に立ちて、職をたのしむに至らば、百事の革新事業、忽ちに成り、風俗の刷新、また、その内にあるべし。かくて、六千万の民衆と共に、その生を娛しむを得は、上は以て、聖明の天子に對へ奉り、下は以て、祖先の靈を辱かしむる事、なきに幾からんか。而して、此の任に當るもの、固より、卓越せる人格と、絶大の力を有

する、天成の、一大人傑に、俟つ所にして、これ現社會が、偉人を俟つ事の切なる所以なれども、微小なる衆の力、又、何を捨つべけんや。世の至大なるものは、これ至微の積集に非ずや、意志の存する所に道あり、いかに小なりと雖も、微なりと雖も、吾人はこれをなすに最もよき位置にあり、豈空しく傍觀して、責任を廻避するを得べけんや。吾等はその責任の重きに、驚き恐るゝと共に、一糸一毫の貢献をなすがために、先づ、最善の方法を用ひて、身体と精神とを鍛練せざるべからず、長大なる體驅必ずしも健全ならず、豊富なる知識を有するもの必ずしも、精神の健全を期し難し、要は、鍛練にあり、即ち、饑餓も苦しむる能はず、寒熱も侵す能はざる身体と、我が道、正しくば、死も亦恐れず、事義にそむかば、苟くも生きざる精神とを養ひ以て、唯我が職に仆れんと突進するにあるなり、嗚呼富を捨て、名譽を捨て、妻子を捨て、身を捨て、恨みざる、不惜身命の覺悟あらば、世の何者か、成らざらんや。世のすべては、血を流すに、成ると、西哲は教たり。又、よしや、身不肖にして、一糸の貢献する所なし

とするも、人よく、この境に至るを得ば、以て自ら、慰むるに足るべし。嗚呼、生を惜み、死を恐れ、美衣美食するも、五十年に足らざるわが生涯なり、寧ろ、碎けて散るの潔きを、學ばんか、世に愛のためと云ひて、一婦人、一男子のために、生命を抛つものあり、同くば、大いなる社會國家の愛のために、肝膽を洒し、鮮血を注がんとは希はざる、しかも、これ義によりて生くるなり。五十年の生涯を以て、永遠の生命を贏ち得たるものなり。

嗚呼、その事業の困難をかこち、社會的待遇の薄きを嗟嘆する輩よ。教育は、固より、直ちに結果を認め得べき問題に非ず。且つ、その樂しみや、余りに高尚にして、物質的慾求を離れ得ざる人の、よく味ひ得べき問題に非ず。故に、これを樂しまんとする者は、先づ、去つてその覺悟の如何を自問せよ。且つ、目を、高く物質以上に開け。然らば、その事業の尊嚴と、國家か吾人の菲才に待つことの厚きを悟り、自己の不知不徳に泣かすんばあるべからず。且つ、われらは、社會的待遇のために動くべきものなるか。更に高き、更に清き義務のために、感激のた

めに、全生涯をあげ、生命を賭して奮闘すべきにはあらざるべきか。然らば、不平不安の雲忽ち去りて、眞如の月自ら、そこに、さやかなるべし。更に、人生の價値を云々し、その不可解を稱ふる輩よ、矛盾撞着の連鎖、万事の不如意なるは、これ人生ならずや。矛盾の分子と闘ひ、不如意の間に活路を見出し、理想の人生を建設せんとする無限の向上こそ、やがて人生の價値にはあらざるべきか。空莫なる宇宙、深淵なる人生、そこに無上の權威は存するなり。あゝ、嗟嘆煩悶の聲をやめよ、唯、直きにより、道徳的大勇の上に立ちて、自己の職業に進む時、すべての道徳は、こゝに集まり、樂またつきざるものあるべし。

嗚呼、現代は多難多事の時なり。この間に生を受けたる吾人は幸ひなるかな、天の將に大任を、吾國家に、降さんとし給ふにはあらざるべきか。日連上人は、三類の強敵に逢ひ奉りたればこそ、色身修行の行者とはなり給ひぬ。吾等、凡人にとりて、これほどの幸、またあらじかし。所詮は、天も捨てよ。諸難にもあはん。の、大勇猛心を以て、進むべきに

はあらざるべきか。況んや、近來先覺者の美しき聲、漸く都鄙に遍きを、豈、至誠熱情の士に乏しからんや。唯、その機を得ざるのみ。一旦、機を得て、その力を一にするを得んか。大任を受くるの日、豈遠きにあらざるべし。吾人小なりと雖も、微なりと雖も、至誠天に通ずの言を信じ、且つ、世の至大なるものは、至微の積集なるを知る。希くは克己奮勵、己れ先づ、本然の自己に歸り、吾等が、未來の教へ子をして、正しき信念の上に立ち、至誠朴直、眞の人間たるに幾からしめば、或は、その職を恥かしむること少なきを得んか。

吾人、法華經に於ける、不惜身命の意を知らず。且つ、われらは、つゆ風流を解せざるもの、固より文をなさざれども、日夜遅々として、一步も進み得ざるに恥ぢ、且つ、將來の重任を思ひては、世にも心よわき我が身を悲しみて、諸賢の御教示を仰がんと、唯、至誠以てこれを草するなん。

斷。片

M.

L.

私達は、やがて、人を教へなければならぬ。併し、私達は、人を教へる前に、まづ、ひとを知らねばならない。ひとを知る前に、まづ、自分を知らなければならぬ。自分を知る事は、やがて、ひとを知る所以である。自分を知る事もなく、自分を考へる事もなしに、どうして、ひとを知り、ひとの事を考へる事が出来やう。自分なしに、他のあり得る筈がない。

私達は、自分を知り、自分を考へた時、はじめて、ほんとうに、生活する事が出来るのではなからうか。私達が、自分と云ふ事を忘れて居る時位、たやすく言ひ、たやすく行ひ得る時はない。そして、たとへそれが、いかに美しく、いかに立派であらうとも、そこに、何ら生きた力を認める事は出来ない。ともすれば、自分を忘れ易い私達は、その忘れた自分の爲めに、自分をうらぎられる事がまゝある。

富川長橋

(龍雲山莊十小記之一)

細田劍堂

富士河沿岳麓。群々入海。兩岸數里。不辨牛馬。稍上。鐵橋架焉。長一萬八千尺。蜿蜒如龍。草堂望之。近在目睫。長橋臥波。未雲何龍。於今知此句之妙。

駿海濤聲

(全 上)

覽古亭下。駿海渺然。田子三保諸勝。百里一目。夜深人定。濤聲與松聲相和。颼颼輕輕。如琴如雷。使人發羈愁。

そう云ふ時は、實に、たよりない、かなしさ、さびしさをしみとく味はふ。

私達が、この世の中に生きてゆく以上、すべての事は、なる様にしかならない、併し、自分としては、どこまでも、そうする、といふのでなければならぬ。自分がしないで居て、なり様筈がない。もし、自分がしないでも、どうにかなると云ふ事があるとするれば、それは、きつと、だれかどうにかするからなるのである。すべての人が、どうにかなる、といつて眼をつぶつて居たら、社會の活動と云ふ活動は、ことごとく、停止するより外あるまい。たとへ、その結果は同じであらうとも、たゞ、なる様になつたのと、自分がしてなつたとは、そこに大きな相異がある。

たゞ、なるにまかせた生活は、他人から見るとんなによくとも、その底を流れる生命の力がない、どうして、その様な生活から、眞の満足や、安心を得る事が出来やう。常に、自分からすると云ふ、自覺をもつて生活する時、はじめて力強いよろこびを感